第６回旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会招致検討委員会	
日時	平成３０年２月１３日
開催場所	関内新井ビル 11 階　関内新井ホール
出席者	涌井 雅之、岸井 隆幸、坂井　文、福岡 孝則、水谷　初子、三輪　律江 若松 浩文、坂田 宏、須磨 佳津江、植木　隆、町田　誠
欠席者	池田　典義、隈　研吾、保井 美樹、和田　新也、渡辺 真理
開催形態	公開（傍聴人７ 名）
議事	基本構想案について
資料	（１）資料１：委員名簿 （２）資料２：席次表 （３）資料３：市民意見募集結果及び考え方について （４）資料４：第５回委員会でのご意見の対応状況 （５）資料５：旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会基本構想案 （６）資料６：旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会基本構想案【概要版】

議事内容

１ 開会の挨拶

【事務局】

・定刻となりましたので、ただいまから第6回国際園芸博覧会招致検討委員会を開催させていただきます。当委員会の事務局を担当いたします政策局政策課の担当課長の折居でございます。みなさまにおかれましてはお忙しい中、ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。まず始めに、当委員会は「横浜市附属機関の会議の公開に関する要綱」に基づき、公開とさせていただきます。傍聴の方がいらっしゃるとともに、会議録も公開となりますので、ご了承ください。

２ 議事

【事務局】

・次第に沿って、議事進行いたします。涌井委員長お願い致します。

【涌井委員長】

・ご案内のとおり本日はこれまで委員の皆様のご協力により今まで５回の会議を重ねて参りました。今日は基本構想案の成案を得ることとなります。この成案を充分ご審議いただいて、良い形で取りまとめたいと思います。

【事務局】

≪資料３： 市民意見募集結果及び考え方について、資料４：第５回委員会でのご意見の対応状況、資料５：旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会基本構想案、資料６：【概要版】の説明≫

【涌井委員長】
・事務局から説明がありました構想案は、委員の先生方からご指摘いただいた事項と市民意見募集の結果を可能な限り盛り込んで作ったとのことです。今日ご審議いただいた結果を反映して、市長に答申という形で説明いたします。本日が最後ですのでご指摘などございましたら、お話いただけたらと思います。
・順序は逆になりますが、オブザーバーとして国から二人お見えになっておりますので、現在北京の花博の準備やその他さまざまな関連する都市政策についてのご意見をお聞かせ下さい。
【植木リーダー】
・北京の園芸博覧会は来年4月から開催されることになっており、国土交通省をはじめ関連団体と準備を進めているところです。農林水産省で花卉を担当している者として北京園芸博覧会を契機に、日本から花の輸出を増やすきっかけにしたいと取り組んでいます。現在、各世帯の花卉の購入額はどちらかと言えば減少気味です。そこでこの園芸博覧会を通して皆さんが緑の効果に改めて気付いてくれて花の購入量が増えるという効果を期待しています。大きな博覧会の準備には、いろいろな問題があると思いますが、日本人らしい組織力を生かした十分な準備を期待しています。
【涌井委員長】
・北京花博において、中国はホーティカルチャーという概念を、食糧増産を含めた生物資源戦略と明確にリンクして、花博を位置付けています。
【町田課長】
・諸先生方の意見や市民意見を反映した内容そのものについての意見はありません。現実的なことを考えたときに思いましたのは、1月半ばにフランスが万博の招致を断念したことを知り、国民全体に税負担を過度にかけないという現実的な判断があったことにびっくりしています。あれ自体の話や同年に手を挙げている大阪の動向をいろいろ意識していく必要があるでしょう。一つには時期のことがありますが、2026年開催をどの様にフィックスしていく必要があるのか。さらに開催経費関係は、作り方と密接に関わってくると思いますが、愛知万博以降1/3ルールが定着しています。「国、地方公共団体、民間事業者から1/3ずつ資金調達をする」ことは、おそらく今回も求められてくるでしょう。その時に、2025年に大阪が博覧会を開催するときもそうでしょうが、横浜も民間企業が支出するお金以上に国や地方が支出できない構造になってくることも現実的に考える必要があるでしょう。それから物の作り方として、今までと全然違うような会場の作り方や会期の６ヶ月を使って作り上げていく等のアプローチがないのかと思いました。おそらく北京は、トルコのように従来型のやり方で開催すると思いますが、横浜では「幸せを創る明日の風景」を作り上げている過程がその会場から感じられる横浜市民の将来の糧になるようなものがあるのかもしれません。愛知万博では、地球市民村が最先端で、パビリオンだけでなく市民によって作り上げられたものでした。このようなことを意識しながら会場計画を進めてもらいたいです。

【須磨委員】
・今回だいぶ整理されてきましたが、序文が問題だと思います。新しさが感じられず綺麗な言葉がつながっているだけなので、序文でアピールしないと先が読まれないのではないかと思います。序文に「これまでに無いこの様なことがしたい」という強いアピールが必要だと思います。
中を読むと理解できますが、この序文からは読み取れません。特に後半に工夫をしてほしいです。上瀬谷から新たな時代への先駆けの実験的なことが行われるのかもしれないと予感させることを書き込んでもらいたいです。
【事務局】
・大阪花博は、パビリオン中心の従来型であったと思います。愛知万博は、地球市民村にみられる様に市民力がエンジンになっていて新しい博覧会の方向性を見出しました。横浜園芸博覧会は、屋外を中心に上瀬谷、横浜全体と繋がりながら見せていく、会場を超える部分があっても良いのではと考えていて、そういう博覧会にしたいという意気込みは持っています。
ご指摘を参考に、序文のところに将来を予見できるような博覧会のあり方を変えていきたいということがわかるメッセージを入れていきたいと思います。
【坂田委員】
・できれば最初のところでキャッチコピーを入れることでより鮮明になると思います。内容のP.9、10の開催意義の内容を見ると「(2)花と緑・博覧会の視点」が最初に来て「(1)国際的な視点」「(3)日本・横浜・上瀬谷での視点」の順番の方がしっくりくると思いました。
開催するには、2022年のフロリアードも意識して考えていく必要があります。園芸博の開催に至るまでの経緯として花と緑のイベント継続していくことが重要で、欧米にもみられる様に市民の心のカレンダーにイベントが定着するような継続的なイベントになることを希望します。
【事務局】
・開催意義の順番については、「国際園芸博覧会日本・横浜・上瀬谷2026」の順を踏まえています。また政府主催となりますので国際的視点を冒頭にして記載しています。
・心のカレンダーは重要と考えていて、全国都市緑化よこはまフェアを踏まえたガーデンネックレスは、市長が花博まできちんと続けることを述べており、将来に残って行くものと考えています。
【涌井委員長】
・全国都市緑化よこはまフェアの成功は評価できます。また、ガーデンシティの考え方を市の中長期のビジョンに入れていくとの事で、市の目論見と国の方向性が合わさった形で国際園芸博が開催できるというプロセスそのものが重要です。そのプロセスに多様なステークホルダーが重なり合った成果が2026年に現れると言うことが大切です。今からそのプロセスを傾斜させ、それを国民や市民が実感していける様なそういう手法を検討する必要があります。
・１/3ルールについては、開催時期が遅れれば遅れるほど国の財政的な支援のゆとりが奪わ

れていくと推測される為、前倒し的にバックキャスティングし、2026年を目標にした上で、何をいつどうして行くかをフォアキャスティングするといった交錯したプログラムを今から作ることが大事です。

【福岡委員】

・提案書は丁寧にまとめて頂いたと思います。しかし、これをどのように伝えていくかが気になっています。今仰っていたような横浜市の強みとして、P12の「１」日本での開催意義」の部分で観光の話がいきなり出てきていますが、現在日本の観光の中で一番ポテンシャルがあると言われている自然資源を活かした観光の可能性などについても少し序文でふれ、これから期待される日本における開催意義に位置づけて頂ければと思います。

・「2」横浜での開催意義」の３項目ですが、「まちを支える市民力の発揮と次世代への継承」に関してです。横浜市の人口は現在約373万人で昨春の都市緑化よこはまフェアには600万人もの参加が得られたとの事でした。先日、世田谷区で町田課長が登壇されたシンポジウムを拝聴しましたが、世田谷区では「世田谷みどり33」という取り組みを行っています。区では人口が90万人を超えるところですが、30万人の区民を巻き込んで緑に関わる活動をしていこうと区民からの提言がありました。人数でなくても構いませんが横浜市でも社会関係資本を育てる目標値などを具体的に示した方がいいと思います。本文の中では約30の大学やNPO等と連携していくとの記載がありますが、具体的にどのような主体や仕組みを巻き込んで色々な動きを作っていくのかを数値化もしくは、図表などで関係性を視覚化して頂けるといいですね。今回の園芸博が与える市民への影響やハピネスは、博覧会のチケットを購入したら自動的に与えられるものではなく、自分から参加して「幸せの風景」を育て、共有していくものだと考えています。そのあたりが理解できるように図化して頂けると良いと思います。

・P27の図について、今回の博覧会を成功させるためにもいろいろな方が博覧会の素晴らしさをイメージできることが大切です。富士山が図示された中心の絵ではなく、周りに描かれているポンチ絵は非常に横浜らしさを凝縮させていますが、鳥の視点から横浜を俯瞰したようなもう少し柔らかいような絵で、この博覧会が新たにもたらす新しい緑と幸せの風景がどのようなものなのかを俯瞰して一瞬でわかるようにして頂ければと思います。

・本日の資料には人の写真が入っていませんでしたが、人と緑の風景というものがもう少し思い切って1つのイメージとして描いて頂けると横浜で博覧会を開催するという意義が細かく説明しなくても理解できるのではないでしょうか。

・P37の会場運営費では町田課長から1/3ルール指摘がありましたが、経済的な価値に加えてこれからの新しい価値やライフスタイルがどのように創出できるのか？を想定でも構わないので示していただけると理解しやすいです。

【涌井委員長】

・経済効果だけでなく、人々のライフスタイルがこんなに変わるきっかけになるかもしれないという定性的な要因もどこかに波及効果として書いてみるという試みもあっても良いかもしれません。

【坂井委員】
・委員会の意見を一つにまとめてもらい感謝しています。
・意見としては、花博の意義をもう一度想起しました。花卉を育てる大地の使い方に立ち戻る大きなアイデアが欲しいです。我々は建築内で生きていますが、未来的には自然に近い屋外や屋内外の境目での生き方なども模索する機会とも思えます。
・提案としては、先ほどお話しのあったプロセスに人づくりを加えたいと考えています。2012年のロンドン五輪の開催前の5年間を見ていて、建設事業を通じて働く人のスキルアップがなされ、五輪後の就業につなげるなどの取り組みがありました。今回も花卉園芸や農業など市民を含め色々な意味での人づくりがバックキャスティングのプロセスにおいて重要でしょう。
・具体的な指摘としては、p17の「みんなでつくる・つくり続ける博覧会」は「つくり育てる」がふさわしいのではないでしょうか。また、概要版の事業展開のイメージ図は気になります。本編には無いものが、グラフィック的に真ん中に位置しているので気なります。イメージがしにくいなと感じました。
【三輪委員】
・これまでの議論をまとめて、細かく入れていただいて良いという印象です。
・人の息遣いが感じられないところが残念です。花や緑はアウトプットの華やかなイメージが持たれますが、一番大事なところは土地を耕すという所で、そこに人が関わる市民活動や人材育成にリンクしています。
・「土地を耕す人の息遣いを感じる」、「そんな人を育てていく」、そういうキーワードをちりばめてもらいたいです。
・加えて福祉的観点も散見されますが、もっと突っ込んだ内容にして欲しいです。数年前に横浜市内の様々な組織に対する農的活動の有無を調査しましたが、幼保小は8割以上、社会福祉法人の6～7割が、大小あるものの農的活動があるとの事でした。農福連携や園芸セラピーなどのキーワードを出しても良いのではないでしょうか。p14の市民力のコメント中ではトーンダウンしている印象があります。学校連携だけでなく幼保との連携、福祉法人等との新しい就業体系や新しいコンテンツを作っても良いのではないでしょうか。
・p27、p32などに人の行動が見えていないので残念。農作物の絵より農作業の人の絵があると良いです。ファームステイも体験と古民家の取り合わせなどが良いと思います。
【事務局】
・p19に事業コンテンツを掲載し、横浜の特色を食からつながる大地や市民力の交流を示しています。
・最近では、人の顔の写真は使い難くなっているのでなるべく文章で書き込みをしました。横浜市は公園愛護会も8～9割の公園にあるので、こうした横浜市の誇るべき財産をもっと横浜市らしさと判るように表現していきたいと思います。
【岸井委員】
・現段階の成果として、政府に申請する為と、横浜市の中で合意する為と、瀬谷地区の関係者の合意を得る為に、多層的な表現になるのはやむを得ないと認識していますが、海外に

対し国際博をとりに行くにはこの形では無いと考えます。英語表記となるので、ｐ18の事業コンセプトは厳しいでしょう。また、グリーンインフラの定義はまだ定まっていないため、できればはっきり横浜での考え方をメッセージとして出すことも大事だと思います。

・概要版には周りへの波及や時間軸の展開も表現されていますが、ｐ24～25会場の構成や概念図を見ると、この敷地やエリアだけで無いという説明が不足しています。横浜市の中にハブが幾つかあり、現況のバックグランドでその中の一つとしてこの会場があるという記載が良いのではないでしょうか。

・ｐ26も同じで、ここでのグリーンインフラのコメントは狭義に感じます。我々自身も概念整理が明確ではありませんが、近代の技術による都市発展と従来からの自然の力の活用と、ICTの発達によるコミュニケーションや参加の重視などの現状を、現況概念図のどこかに表現しておきたいと感じています。

【涌井委員長】

・大変重要なご指摘でした。今まではマスな塊や階層といったものが融合してシステムを作ってきました。しかし現在は１人１人の個がバラバラにあり、そこに花や緑があることでアルゴリズムのように１つの方向性としてまとまっていく事を考えると、バインダーとしての花や緑は阻害要因がないと思います。

【岸井委員】

・P7の図もやや異なっているのではないかと考えています。いままでの市民の力などがどこに行ってしまったのかと思うので、もう一度整理が必要ではないでしょうか。私たち自身がグリーンインフラとは何なのかということによると思います。

【事務局】

・事務局ではこの委員会を始めてからグリーンインフラについて悩んでいる所です。博覧会の構想に合わせてグリーンインフラを突き詰めていきたいと考えています。まだ結論は出ていませんが、岸井委員のご指摘のようにP26のように記載してしまうと現時点の上瀬谷の延長としてのグリーンインフラをただ緑として残すことや農を残していくなど、一般的なものになってしまうのでもう少し脱皮が必要だと考えています。

・博覧会そのものがゴールでそのレガシーをどうしていくかなどではなく、横浜としてグリーンインフラを博覧会でどのように見せていくかが重要だと考えています。これから市では中期の計画を策定していくことになりますが、その中にもグリーンインフラの考え方をしっかりと取り入れ実践し、それを世界に見せていく事にチャレンジしていきたいと思っています。

・英語で考えていくという事についても以前同様のご指摘を頂きました。まずは政府に提出するという事で日本語で記載していますが、この点についても引き続き検討してまいります。

【水谷委員】

・これまでの議論を踏まえてみると、すぐにはイメージできなかったものがかなり具体化されてきたと感じています。委員の皆様の意見を伺っていて「人の姿」が出てきていないというのはインバウンドの観点から申し上げても、市民と観光客との交流や教育など、

博覧会の期間だけでなく、それまでのプロセスや閉会後も含めて考えていく必要があります。滞在型など今までにはない新しい博覧会をするのであれば会期だけでなく博覧会を作っていくころからプロセスのなかで体験できるようにした方が良いのではないでしょうか。6ヶ月間だけでなく定着させるためには年数が必要になってくるので、新しい形を提案していく博覧会の前後も上手に活用し、農体験を通じて市民と観光客の新しい交流をして頂き、日本の魅力が改めて見直されるきっかけになればと思います。

【若松委員】

・実際にこの会場で1,500万人を来場者数の目標値とするなら平日には5～6万人、休日には10万人程度来場しなくてはなりません。そのような風景を作るのに今まで通りの博覧会を開催するとなると、愛・地球博のように、皆さん研究なさっているのでどのような入れ方をすればよいのか大体わかっていると思います。ただし、今回は園芸博覧会なので通常の博覧会とは違った方法で表現しないと、なかなか魅力は伝わらないのではないでしょうか。

・資料を読んでいても論理性はわかりやすく伝わってきますが、ダイナミック性が足りないのではないでしょうか。町田課長がご指摘のように1/3ルールをきちんと踏まえておかないといけなくて、この文章を読んでイメージが湧かないのが企業や出展者だと思います。企業が参入したり、出資したいというイメージが湧かないと博覧会を運営していく事業としてはマイナスに働くと思います。パビリオン型ではない新たな形を考えた時に、会期の180日間を3分割したりするなど全体が変わる方法論があるのではないでしょうか。季節によって景観は違うので大きい面で変わっていくという方法もあると思います。屋根付きの実験場などもう少し実験やプロトタイプを作るなど、大きい表現が伝わるようなイメージが出来てくればよいと考えています。

【涌井委員長】

・会場計画やダイナミックな魅力をどう創出していくのかということについて貴重なヒントであったと思います。私の経験からも一気通貫では無く、この時期、この時間という様に焦点を絞る事で魅力をどの様に伝えるのかという演出の手法に力を入れる事が大事です。風景は、物理的景観だけでなくその中に人がいないと風景にならないので、その様な演出を行うヒントを各委員から頂きました。

・先ほど岸井委員からご指摘いただいたように、横浜市の事情から言えば、地元の合意と議会や庁内全体のコンセンサスをとる上で、本日の資料のような文章になることは理解できます。しかしこの資料を国際的、かつ2025年の大阪博覧会のことも意識しながら2026年に招致をしていく事になると、内向けとは違った別の整理の方法で戦略的に考えていかなくてはなりません。そのような中で、一番腰が定まっていないのは目標来場者数を何人に設定するのかということです。交通計画やその他の問題と密接不可分です。これらを会場計画の一部に組み込んでいく事についても、返還後の土地利用の扱い方が決まっておらず、その部分は歯切れのよい案になっていません。

・国際万博と国際花博は基本的に違っていることを戦略的に意識しながら2025年に大阪が立候補していることについて足を引っ張るのではなく、ぜひ大阪にも招致してもらいたい

です。今世界がどのように見ているかというと、アジアが世界の牽引力として機能しているのは間違いないですが、あらゆる国際イベントが東アジアに集中しすぎているという見方がされています。一連の流れのなかでどのような主張をしていくのかが問われてきています。

・本日委員の皆様からご指摘いただいたことの一つとして、横浜市が市民力で行政を回してきたということは世界に誇れることであり、国内においても特異的であると言えます。そのような「人の姿」をもっと明確にしていくべきではないでしょうか。さらに開港都市であって花や緑の国際的な関係について非常に重要な役割を担ってきていること、産業面や定性的な面の両面から貢献してきたという事実を踏まえると、横浜市が招致をしているという資格はあると思います。先ほど議論にあったように花と緑がバインディングの役割を果し、様々なシーンをつくり人々が活性化すること、同時にライフスタイルを供給することと仮定すると、様々なライフスタイルの提案を横浜からしていくことができると思います。そうすると、「Scenery」という言葉のように、様々な自然物を扱っているが故にそれぞれのシーンも変わっていくような流れができるはずです。このような整理を横浜市はできるだけ急いで力が注げるような形で合意形成をして頂きたいです。ガーデンシティという将来像を明確に持っているのであれば、そこに向けて博覧会との関連性を明確にしながら進めていってほしいです。

・本日の意見を事務局に早急に整理して頂いて、最後に私が文章をとりまとめさせて頂けないでしょうか。それでは、その点を前提に事務局から最後のとりまとめをお願い致します。

【事務局】

・本日頂いたご意見は早急に反映してまいります。様々な条件のなかで報告書をとりまとめていますが、前回の愛知万博の際にも海上の森から青少年記念公園に移ったといった様々な制約のなかで市民力を活かした地球市民村という新しいアイデアを出して、それが博覧会の方向性を新しくしたということもあるので、今回のテーマも「Scenery of Happiness」の間に「The Future」を入れたことで様々な制約が新しい価値を生むという方向へいきたいと考えています。市民力とグリーンインフラは博覧会の大きな軸にしていきたいと考えていますが、市民力の部分についてはもう少し書き込まなくてはならないと思います。また、委員長からご指摘いただいた跡地を含めた全体的なスピード感については、2026年まであまり時間がないのでしっかりと認識し、かつ地元の意見を踏まえなるなど、ご意見をしっかり反映させてまとめていきます。

【涌井委員長】

・ありがとうございました。では、今回の議論をお預かりして私の方で取りまとめ、皆さんにご報告していきたいと思います。